

富山大学人文学部令和 5 年度卒業論文

テレビドラマにおける性的マイノリティの表象

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 12219001
氏名 齋藤あかり

目次

第1章	問題関心	3
第2章	先行研究	4
第1節	これまでの「オカマ/オネエ」キャラクターの表象	4
第2節	性的マイノリティの表象と社会の認識	5
第3章	調査概要	7
第4章	分析	9
第1節	「逸脱」の画一的表象とその否定	9
第2節	「恐怖」の対象としての画一的表象とその否定	16
第3節	表象の幅の広がり	22
第5章	考察	25
第1節	逸脱と「恐怖」の対象に関する昨今の表象	25
第2節	表象の攪乱	28
〈参考文献〉		30

第1章 問題関心

性的マイノリティが登場するテレビドラマを昨今よく見るようになった。性的マイノリティが脇役として登場する作品はもとより、主人公として登場する作品も珍しくない。LGBTQ+の認知度が社会的に高まっていることが少なからず関係していると思われる。しかし、メディアによる表象によって性的マイノリティの偏見が助長されたことが過去にあった。現在話題になっている作品も偏見を持った表象を引き継いでいるのだろうか、それとも変化しているのだろうか。このことを踏まえて昨今のテレビドラマを分析し、性的マイノリティが現在どのように表象されているのかを明らかにしていくことを目的とする。

第2章 先行研究

第1節 これまでの「オカマ/オネエ」キャラクターの表象

木場（2019）は、性的少数者の可視化に伴いあらゆるメディアで性的少数者のキャラクターを目にする機会が増えている一方で、性的少数者を被抑圧的立ち位置に追いやる表象が見られることを指摘している。「オネエ」キャラクター・タレントのセクシュアリティがしばしばその他男性出演者・キャラクターや視聴者にとっての「恐怖」の対象、異性愛からの「逸脱」として描かれていることを指摘している。また同論文内で「メディアにおける性的少数者の構築とはその異性愛者との差異を際立たせ、他者化する（＝他者として名づける）ことであった」という指摘もしている。性的マイノリティの人々を目にする機会が増えているにもかかわらず、その表象は身近な事柄ではないもの、どこか一線を画しているものとして描かれていることが読み取れる。

第2節 性的マイノリティの表象と社会の認識

木場（2018）は「メディアにおける性的少数者の表象については存在の可視化といったポジティブな効果も認められる一方、偏見を助長するといったネガティブな影響も批判されている。」と述べており、論文内で取り上げた正木氏ほかによる「性的少数者の存在が以前ほど「特別」ではなくなったにも関わらずその表象にはいまだ画一的な側面が見られる」という指摘にも同意している。このことから、性的マイノリティのキャラクターは偏見を持たれるような描かれ方をされているなど、適切な表象がされていない作品が存在していることが分かる。

一方村本（2017）は1990年代後半から2010年代の性的少数者のキャラクターが登場する恋愛ドラマ作品5本について、これまで性的少数者のキャラクターが登場する作品のパターンであった「悲劇的結末」に至らなかった作品が複数あることを指摘しており、この要因の一つとして多様な性を受け入れる社会の風潮があると考察している。村本

（2017）と木場（2018）の指摘から、昨今の作品において性的マイノリティの表象に変化が起きていることが推測される。

また木場（2019）はメディアにおける性的少数者をめぐる表象に「攪乱」が起こる可能性について言及しており、またすでにメディアにおいて表象の攪乱が起こっていると述べている。木場（2019）は「新しいキャラクター（原文ママ）の登場によって表象の揺れが見られること、このことが攪乱の現れであるとともにその契機となる」と述べている。また多様なセクシャリティや性のあり方を可視化することや、性的マイノリティの人それぞれに適切な表象をすること、男性または女性に対しこれまでの男性像/女性像を当てはめないことなども攪乱のきっかけとなると木場は主張している。表象の攪乱の例として木場が挙げたのが、テレビタレントの「カズレーザー」の表象である。カズレーザーはバラエティ番組では「オネエ」タレントと同様に表象されている場面もある一方で、そうでない場面もある。それまで高い声で話すなど「女性的」にふるまっていた人が、ある場面で一時的に低い声で話すなど「男性的」な面を出すという表象をされてきたという背景がこれまでの「オネエ」タレントにあり、これを「素”が出る現象」と木場（2019）は引用している。カズレーザーはこの「素”が出る現象”についての表象が見られなかった。カズレーザーの普段の振る舞いや外見が「女性的」ではないこと、バイセクシャルであることなどが「素”が出る現象”が見られなかったことの理由として挙げられる。女性に性愛を抱くことを「男性的」とし、男性に性愛を抱くことを「女性的」とするようなこれまでのやり方では、バイセクシャル男性であるカズレーザーを十分に表すことが出来ない。カズレーザーはこれまでメディアが取り上げてきたような「オネエ」タレントと共通した要素として男性を性愛の対象としていることが挙げられる。一方で相違した要素である、女性を性愛の対象としていること、普段の振る舞いや外見が「男性的」であることも同時に併せ持っているため、「素”が出る現象”がそもそも見られないといった、以前の「オネエ」タレントと異なる表象の特徴が見られたのである。

以上の先行研究を踏まえて、本調査では昨今の性的マイノリティ（主にゲイ）キャラクターが登場するテレビドラマ作品において、「表象の攪乱」となるであろうシーンを取り上げ、その特徴について分析していく。

第3章 調査概要

本調査で対象としたのは以下の3作品である。一つ目の選出理由は、性的マイノリティであるゲイのキャラクターが登場しているという点である。二つ目の選出理由は、先行研究で取り上げている作品よりも新しいということである。先行研究で取り上げられている作品と年代が異なるものであれば、何かしらの相違点が見られるかもしれない期待があったため、選出した。三つ目の理由は、どちらも反響があった作品だということである。以下の作品は、新春/正月スペシャル、または劇場版という形で続編が発表されている。続編の発表はその作品の反響を測る一種の指標になりうると考える。多くの人の目に触れた作品に性的マイノリティのキャラクターが登場しているため、多くの人の性的マイノリティに対するイメージに影響を与えたり、世間が性的マイノリティに対して抱いている最近のイメージを反映したりしているのではないかと考えた。

・『逃げるは恥だが役に立つ』(2016)

契約結婚をして仮面夫婦となった津崎平匡と森山みくりが、同居生活を通して本物の夫婦になっていく様子を描いた作品。TBS系列にて火曜 22:00~23:00 に放送された。

原作…海野つなみ『逃げるは恥だが役に立つ』(講談社)

〈登場人物〉

津崎…主人公の男性。みくりと仮面夫婦関係にあり、みくりの雇用主にあたる。

みくり…主人公の女性。津崎と仮面夫婦関係にあり、津崎の従業員にあたる。

沼田…津崎の同僚でゲイである。周囲にゲイであることを察されている。

風見…津崎の同僚でゲイではない男性。独身である。

日野…津崎の同僚で妻子のいる男性。

『逃げるは恥だが役に立つ』では、仮面夫婦や年齢差のある恋愛、同性での恋愛など、様々な恋愛の形が描かれるが、そのいずれにおいても最終回では関係性がポジティブな方向に進んでいる。このような最終回の迎え方は、多様な恋愛の形を肯定していると言える。多様な生き方や恋愛の形に対し肯定を示す際に性的マイノリティが取り上げられるのは珍しいことではないと考える。性的マイノリティは文字通りマイノリティであること、そして性的マイノリティの表象や世間の認識にネガティブなものが多かった過去があることが理由として挙げられる。

・『きのう何食べた?』(2019)

ゲイカップルで一緒に暮らしている笥史郎と矢吹健二の日常を描いた作品。テレビ東京系列にて土曜 00:00~1:00 に放送された。

原作…よしながふみ『きのう何食べた?』(講談社)

〈登場人物〉

史郎…儉約家の弁護士。家族にはカミングアウトしているが職場をはじめ周囲にはゲイであることを隠している。

健二…人当たりの良い美容師。職場ではゲイであることをオープンにしており初対面の客にもカミングアウトすることがある。

藤本（2019）は『おっさんずラブ』や『きのう何食べた？』にて男性同士の幸せな日常が描かれることは、マイノリティは不幸であるという固定観念を払拭するものとして機能することを指摘している。

・『30 歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』（2020）

30 歳の誕生日を迎え、触れた人の心が読めるようになった安達が、周囲の関係性を変化させていく様子を描いた作品。テレビ東京系列にて金曜 1:00~1:30 に放送された。

原作…豊田悠『30 歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』（スクウェア・エニックス）
〈登場人物〉

安達…触れた人の心の声が読める。

黒沢…安達の職場の同僚。安達に好意を抱いている。

六角…安達の職場の後輩。湊の友達。

藤崎…安達の職場の同僚。

柘植…安達の友達の小説家。触れた人の心の声が読める。

湊…配達のアルバイトをしている。柘植の住むエリアを担当している。

藤本（2019）の指摘を踏まえ、春日（2022）は『30 歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』について、恋愛をするのに性別は障壁にならず、また恋愛をしなくとも、夢をかなえることが出来なくとも、夢がなくとも断罪されることのない、多様な生き方を肯定する作品であると述べている。多様な生き方を肯定する作品という評価は、『逃げるは恥だが役に立つ』にも一部当てはまると考えられる。

第4章 分析

分析で使用するシーンは、木場(2019)に則った方法で文字起こしを行いデータ化した。使用したトランスクリプト記号は以下の通りである。

() テロップ等 [] 場面・状況説明 (.) 小休止
〈 〉 比較的ゆっくりとした発話 [発話の重なり
@ 笑い ↑ 直後の音の上昇 h 呼気 : 音の引き伸ばし
(()) 動作説明 ° ° 比較的小声での発話 **太字** 声の調子が変わった箇所

第1節 「逸脱」の画一的表象とその否定

まずは性的マイノリティのキャラクターを「逸脱」として描いているシーンと、それを否定しているシーンを取り上げる。

データ1、2で取り上げるのは『逃げるは恥だが役に立つ』である。データ1とデータ2には関連性があり、データ1のシーンで津崎が持っていた偏見が、その後のシーンであるデータ2で否定されている。沼田が鋭い人なのはゲイであることに起因し、男女両方の視点を持っているからという津崎の発言から、津崎にとってゲイは「普通」から「逸脱」した属性なのだと推測できる。

<データ1>

津崎とみくりの会話。沼田が鋭い人なのは男性と女性どちらの視点も持っているからではないかと津崎が推測するシーン。(『逃げるは恥だが役に立つ』2話より 26:05~)

津崎：しかし、沼田さんには今後も気をつけなければ

みくり：鋭い人なんですね

津崎：本人に確認したわけじゃないんですが、沼田さんはゲイだという話があります

みくり：はあ

津崎：男性視点と女性視点、どちらも持っているからこそその鋭さがあるんじゃないかと

<データ2>

津崎の会社での会話。津崎の推測を同僚の風見と日野が否定するシーン。(『逃げるは恥だが役に立つ』7話より 34:15~)

日野：はいそこの男子：二人でイチャイチャしてるとまた沼田さんに誤解されるよ：

津崎：@まさか沼田さんが、僕と風見さんが相思相愛だと思っていたとは

風見：@笑っちゃいましたねh

津崎：沼田さんって鋭い人だと思っていました 男目線と女目線の両方を持っているとうか

風見：持ってないでしょ

津崎：(.) えっ？

風見：ゲイだからどうこうじゃなくて、沼田さんは単に沼田さんなんですよ

日野：うん あれは沼田頼綱っていう生き物だ h まっ、鋭い人っちゃあ鋭いけどね@@

風見：一周回って斜め上 h

日野：@@@

津崎：(.) 自分が決めつけられるのは嫌なくせに、どうして人は偏見を持ってしまうんでしょう

男女両方の視点を持っているという津崎の指摘に対し、風見が「持ってないでしょ」と台詞での否定を行っている。風見の台詞を受けて津崎は自分の中に偏見があったと気づき、自分を顧みている。このような偏見を修正する描写は、偏見の否定をより強固なものにしている。ゲイは男女両方の視点を持っているという偏見は、多様な視点を持っていると読み替えることもできるため、必ずしも否定的なニュアンスを含んでいるわけではない。このような分かりにくい偏見を修正するシーンを描く意味としては、津崎のセリフから、他人に自分のことを決めつけられるのは嫌なことであり、他人も何かを決めつけられることに対し嫌だと思っているのだというメッセージを視聴者に伝えるためではないかと推測される。

次に取り上げるのは『きのう何食べた？』である。データ3とデータ4には関連性があり、データ3で言われた偏見について史郎が思ったことを、データ4で第三者に話している。史郎の母が犯罪者とゲイを並列していることから、史郎の母にとってゲイは「逸脱」した属性だということが推測できる。

<データ3>

母の久栄が史郎に対し思っていたことを話すシーン。母は史郎がゲイであることを受け入れたいと思っているが、会話の中でゲイと犯罪者を並列している。(『きのう何食べた？』3話より 02:28~)

母：あのね ずうっと、考えてたんだけど： 史郎さん、これだけは覚えておいてほしいの
(.) お母さん、史郎さんがゲイでも、犯罪者でも 〈史郎さんの全てを、受け入れる覚悟はできてるつもりよ〉

[史郎が母を真顔で見つめる]

<データ4>

史郎と料理仲間の佳代子の会話。データ3の出来事を史郎が佳代子に話している。(『きのう何食べた？』3話より 06:23~)

佳代子：あら　じゃあご両親は、寛さん（史郎）がゲイだってことご存じなのね：　それは少し気が楽なんじゃない？

史郎：知ってるからって分かってくれてるわけじゃありませんから　特に母親にとっては、俺は犯罪者と同じだし

佳代子：犯罪者？

史郎：(.) ああ、いや…

データ3の史郎の母による発言には「犯罪」というかなりネガティブな意味合いの単語が使用されており、かつゲイと犯罪者を並列している。この二つは母の久栄にとって同列であることが読み取れ、母にとって息子がゲイであるということは、受け入れるのに覚悟を要する事柄であることがわかる。データ4の史郎の発言からも、史郎の母はゲイと犯罪者を同じものとして見ていると史郎は読み取っていることがわかる。データ3の史郎の母の発言に史郎は何の反応も返さないことに加え、『きのう何食べた？』全12話において史郎が「犯罪者らしい」行動をすることはない。よって史郎の母が持っている偏見を否定する構図になっていることが読み取れる。またデータ3、4には『きのう何食べた？』によく見られる、偏見を言われてその場で言い返したり説明したりすることがない構図が見られる。

次は『きのう何食べた？』からシーンを取り上げる。データ5とデータ6では、史郎の両親がゲイに対する偏見を持っており、史郎に対し偏見を含んだ発言をしていることがわかる。史郎の父も母も史郎に対し、史郎の「少し変わっている」面に注目していることから、少し「逸脱」した存在としてゲイである史郎を見ていることが推測できる。

<データ5>

実家に帰った史郎が母と会話をするシーン。母の発言にゲイへの偏見が含まれている。（『きのう何食べた？』3話より　00:45～）

[史郎が実家への手土産にエクレアを持ってくる]

史郎：母さん。いろんな種類のエクレア。事務所の人がここのが評判いいって言うから買ってきた。

母：あっそう、ありがとう。（（箱を開ける））まあ…きれいに作ってあること。嬉しいけどh（（溜息））こういうことに気が利きすぎるってところも、やっぱりちょっと女の子みたいねえ・・・。

史郎：（（首をかしげる））

<データ6>

実家に帰った史郎が父と会話をするシーン。父の発言にゲイへの偏見が含まれている。（『き

のう何食べた?』3話より 03:11~)

父：美味しいよ、このエクレア

史郎：よかった お父さん甘党だったよね?

父：うん お前体のほうはどうなんだ?四十も過ぎるとどこかしらガタが来るもんだろ

史郎：いや 今のところ特に悪いところはないよ

父：そうか まあそれはよかった お前は昔っから意志の強いところがあったから きちんと節制してんだろ

史郎：まあ自分のことくらいはね

父：h お母さんもお前の顔を見て安心したと思うよ で(.) どんな女なら大丈夫なんだ お前はh

史郎：((ぎこちなく笑い、目線をそらす))

データ5から、ゲイは女性らしい男性であるという偏見を史郎の母が持っていることが分かる。データ6からは、史郎の父がゲイも「本当は」女性と恋愛できるという誤った認識を持っていることが分かる。このどちらにも、史郎は納得のいっていないリアクションを返しているほか、『きのう何食べた?』全12話において史郎が女性のように振る舞ったり、女性を恋愛対象として見たりする描写はないことから、偏見の否定を行っていると言える。これに加え、LGBTQ+等について知識のある人であれば、「ゲイは女性らしい男性である」「ゲイも本当は女性と恋愛できる」といった考えに疑問を持てることから、わざわざ分かりやすい形で偏見の否定を行っていないのではないかと推測する。これは分かりやすく偏見の否定が行われている『逃げるは恥だが役に立つ』と異なっている点である。またデータ5、6は『きのう何食べた?』によく見られる、偏見を言われてその場で言い返したり説明したりすることをしない、または出来ない構図が顕著である。

次も『きのう何食べた?』からシーンを取り上げる。データ7では史郎の父と健二のやり取りから、史郎の父と母がゲイに対し偏見を持っていることがわかる。また史郎の父と母はゲイを「逸脱」した存在として捉えていることが推測できる。

<データ7>史郎の実家に行った帰り道での史郎と健二の会話。史郎の父と健二が二人で何を話していたのか気になった史郎が会話の内容を尋ねるシーン。史郎の父の発言にゲイへの偏見が含まれている。(『きのう何食べた?』12話より 17:07~)

史郎：なあ健二

健二：うん?

史郎：二階に行った後、親父と何話してたの?

健二：ああ 色々話したけど、お父さん結局、ずーっと聞きたいことがあったみたいよ

史郎：なに？

健二：えっとね…なんていうか…

[回想。健二と史郎の父の会話]

父：あのなっ矢吹さん、その、あの、

健二：何でしょう？

父：きっ、君がそういうスーツを着てるということは、家の中で女の格好をしているのは、史郎のほうかね

健二：h (.) ((首をかしげる))

[回想終了]

史郎：なんだそれ

健二：気になってたんだと思うよ？

史郎：あっそれで、最初に健二の顔見たとき二人とも一瞬変な顔したんだな： さっき食事中にお袋呼び出したのは、その話するためだったんだな？

健二：お父さんたちは、どうしても男同士ってのが理解できないみたい どっちかが、女の格好をするもんだって思い込んでみたいよ

史郎：えっ？じゃあ親父もお袋も、家ではお前が女装してると思ってるのか？

健二：(.) 多分ね

史郎：まったく… ほんとにスマン 頭の固い親たちで

健二：いいよいいよ それでご両親がちょっとでも安心できるなら、いいじゃん

ゲイは女性らしい(女装をしている)男性であるという偏見を史郎の父が持っていることが分かる。史郎の父の発言を受けた健二に対し、「ほんとにスマン 頭の固い親たちで」と史郎が謝罪していることから、史郎の父の発言は失礼なものであったことがわかるほか、『きのう何食べた?』全12話において史郎または健二が女装をするシーンや女装に興味があるような描写はないため、偏見の否定が行われていると言える。データ7では、偏見を言われてその場で言い返すことが出来ない構図が見られる。史郎の両親に女装をしていると思われることについて健二は、「それでご両親がちょっとでも安心できるならいいじゃん」と述べており、誤解を解き偏見を正すことを諦めている可能性が推測される。

次は『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』からシーンを取り上げる。『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』では偏見を持ったキャラクターが登場せず、データ8で登場する、「ゲイであることを理由にその人を避ける」という差別についても、後半で誤解であったことがわかる。

<データ 8> 柘植が湊を避けていることについて、湊の友達である六角から問い詰められ、誤解を解くシーン。(『30 歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』9 話より 11:39~)

六角：なんで湊傷つけんすか？

柘植：傷つける？俺が湊をか？

六角：あいつのこと避けてるらしいじゃないすか あいつが、ゲイだからですよ？

[回想。六角と湊が電話をしている]

六角：どういうことだよ

湊：だから 圭太により戻そうって言われて、断ったら無理やりキスされた

六角：で？それを柘植さんに見られたってこと？

湊：うん

六角：何か言われたのかよ

湊：いや(.)でも多分避けられてる

六角：え？

湊：俺がゲイだって知って(.)距離取ってるんだと思う

六角：んだよそれ

湊：(.)もういいんだ 配達エリアも変えてもらうつもりだし で、悪いんだけど 六角から柘植さんに伝えてもらえないかな

[回想終了]

六角：“もう近寄らないから安心してください”って 湊が

(中略)

六角：そんなくだらないことであいつを避けんのかよ！距離取るのかよ！

(中略)

柘植：確かに俺は湊を避けてた(.)けどそれは、ゲイだからじゃない

データ 8 の六角の発言から、相手がゲイであることを理由に交流を断とうとするのは「くだらない」ということが示されている。柘植もこれを否定する発言をしており、相手がゲイであることを理由に交流を断とうとすることに対し肯定的な反応をする人物はいないことがわかる。偏見を持ったキャラクターが登場せず、作品内における偏見が誤解であることは、『30 歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』の特徴の一つである。

第 1 節では、性的マイノリティを「逸脱」として描いているシーンと、それを否定するシーンを取り上げた。三作品それぞれに性的マイノリティの表象に関して特色が見られた。また表象の攪乱と呼べる描写も多く、主に偏見を否定するシーンがそれにあたる。

まず、『逃げるは恥だが役に立つ』は三作品の中でも偏見を否定する構図が最も分かり

やすく描写されていた。主人公の津崎がゲイキャラクターである沼田に抱いていた偏見は、「男女両方の視点を持っている」という、読み替えればポジティブな意味にも捉えられそうなものだった。このような分かりにくい偏見が第三者である風見の発言によって否定され、その場で話を聞いていた日野も風見の考えに賛同するという、偏見の否定に至る一連の流れが丁寧に描写されていた。偏見を否定する流れを丁寧に描写することで、視聴者が偏見を持つことや他者を決めつけることについて考えるきっかけを生み出す狙いがあるのではないかと推測している。また『逃げるは恥だが役に立つ』ではゲイキャラクターに対し直接偏見の言葉が投げかけられることはない。

対して、『きのう何食べた?』のゲイキャラクターは面と向かって偏見を含む発言を受けている。これにより、偏見を言われてその場で言い返すことが出来ない、またはしないという構図が生まれており、『逃げるは恥だが役に立つ』よりも偏見を否定する描写は分かりづらくなっている。だが同時に偏見を面と向かって言われた性的マイノリティの反応をよりリアルに描くことが出来ている。偏見を投げかけられれば少なからず傷つくことは想像に難くないほか、即座に言い返すことの難しさや、反論や説明をしても分かってももらえないことへの諦めがあるであろうことから、偏見に対し言い返すことが出来ない、またはしない構図が生まれるのは自然なことだと考えられる。また『きのう何食べた?』において偏見を持ったキャラクターは最後まで偏見を持ったままであり、『逃げるは恥だが役に立つ』のように自分がこれまで持っていた偏見と向き合い、考えを改めるような描写はされない。注目しておきたいのは、史郎の母は史郎がゲイであることを受け入れたいと思っていることである（データ3より）。にもかかわらず史郎の母は最後までゲイを理解することが出来なかった。これは、マイノリティの属性を理解し受け入れることの難しさを表していると考えられる。

『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』では、性的マイノリティに対し偏見を持ったキャラクターが登場しない。そのため『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』において偏見の否定は、「柘植はゲイに対する偏見を持っている」と勘違いしていた六角の誤解を解く、という形で行われている。本当は偏見を持っていないが偏見を持っていると思われてしまい、すれ違うという描写は、取り上げた三作品の中では『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』にしか見られない。偏見を持ったキャラクターを登場させないという表象の仕方が特徴的であることがわかる。

いずれの表象も、性的マイノリティを「逸脱」として位置付ける発言や考えを性的マイノリティでないキャラクターが持っているということを描き、その後それらの発言や考えを否定するシーンが描かれている。木場（2019）は新しいキャラクターの登場によって表象の攪乱が起こると述べていたが、今回調査対象にした三作品においては、既存のイメージを否定することが攪乱のきっかけになっていると推測される。

第2節 「恐怖」の対象としての画一的表象とその否定

次に性的マイノリティのキャラクターを「恐怖」の対象として描いているシーンとその否定のシーンを取り上げる。

まず取り上げるのは、『逃げるは恥だが役に立つ』のシーンである。津崎は、風見とゲイキャラクターである沼田が一緒に部屋で寝ることで、沼田が風見を襲うのではないかと懸念している。データ9前半の時点では、沼田は津崎にとって、「恐怖」の対象として映っている可能性が高い。

<データ9>

津崎の家に泊まることになった沼田と風見が二人きりで寝ることを津崎が懸念していたが、沼田と風見の会話を聞いて考えを改めるシーン。（『逃げるは恥だが役に立つ』2話より37:00~）

[津崎家に遊びに来た沼田と風見が急遽泊まることになり、津崎とみくりが焦る]

津崎：沼田さん

みくり：沼田さん？

津崎：風見さんと二人きりで寝かしたらまずいじゃ…

（中略）

[沼田、風見と一緒に部屋で寝ることにした津崎が寝たふりをしている]

沼田：° 津崎君 津崎君° 寝ちゃったか

風見：何でこっち来たんだろう

沼田：俺が風見君によからぬことをするんじゃないかって心配になったんだよ

風見：え：↑？

沼田：男とみれば誰彼構わず襲いかかると思ってんだよ

風見：その気のない相手に襲い掛かったら、男女問わず犯罪ですよ

沼田：だよね： いいよなあ 普通に愛を育める人は

風見：俺ストレートだけど育んでませんよ？

沼田：育もうよ、少しは

風見：@@@

沼田：@@@

[沼田と風見が寝る]

津崎：（（心の声））知らないって、怖い 僕はこれまでどれだけの人を、どれくらい傷つけてきたんだろう ひょっとしたらみくりさんだって、僕の考えなしの言動に傷ついたり、言いたいけど言えない気持ちを隠していたりするのかもしれない

相手の合意を得ずに襲うことは犯罪であるという風見の指摘に「だよね」と沼田が同意することで、偏見の否定を行っていることが分かる。偏見を持っていた津崎が自分の言動を顧みて考えを改めるシーンがあることで、偏見の否定をより強固なものにしていると考えられる。性的マイノリティ（主にゲイ男性）のこれまでのステレオタイプの表象を否定することにより、津崎が何かを決めつける行為によって他人が傷ついているかもしれないということに気付き、性的マイノリティに関することだけではないこれまでの自身の発言や考えを反省しているというのは、注目すべき点である。他人のことを決めつける行為や考えなしの発言は、他人を傷つける可能性があるということ、性的マイノリティの表象を通して伝える狙いがあるのではないかと推測される。

次も『逃げるは恥だが役に立つ』からシーンを取り上げる。データ10、11、12は沼田を「恐怖」の対象として描いているという共通点がある。データ10では風見の服に盗聴器を仕掛けてあると沼田は発言しており、データ11では津崎をずっと見ていることを沼田はほのめかしている。またデータ12では津崎のことを狙っていたと沼田は発言している。データ10、11、12のいずれも、これらの発言について沼田は冗談だと続けている。

<データ10>

昼休憩時の津崎の会社で、同僚たちとご飯を食べているシーン。沼田が津崎に弁当を作することを提案し、即座に拒否される。沼田が風見の服に盗聴器を仕掛けてっていると冗談を言う。（『逃げるは恥だが役に立つ』1話より 13:27~）

沼田：食生活、大切だよ： そうだ、津崎君の分も明日から俺が〔作って

津崎：〔結構です

沼田：瞬殺だね

津崎：食べられれば何だって

沼田：ふーん

〔風見が帰ってくる〕

沼田：風見君おかえり： 彼女の機嫌直った？

風見：何で知ってるんですか？

沼田：風見君の服に、盗聴器仕掛けてあるから

風見：h また：

沼田：@@@ 冗談だよ冗談 女の子と二人でお店に入る所偶然見ちゃったから たまたま偶然

<データ11>

会社にて、みくりに「ならいっそ、結婚しませんか？」と言われたことが気になって仕事の

手が止まっている津崎に沼田が声をかけるシーン。（『逃げるは恥だが役に立つ』1話より 28:50~）

沼田：20分に一度、何かに思いをはせるように手が止まっている（（津崎と見つめ合う））
たまたま見てただけだから 偶然、たまたま この素晴らしき人生の先輩に話してみないか？

津崎：話すことなんて何も

沼田：俺はインフラエンジニアだ サーバーに異変がないか監視するのと同様に、津崎君の少しの異変も見逃せない これはもう職業病だ このままじゃ、俺は心配のあまり24時間体制で津崎君のことをなめるように見つめ続けるかもしれ [ない]

津崎：[僕ではなく、知人の話ですが]

沼田：うん

津崎：（.）（（周囲を見渡し、沼田に向き合う））ならいっそ、結婚しませんか？

沼田：（（目を見開いて驚く））

津崎：あっ沼田さんに言ってません

沼田：（.）分かってるよ

津崎：「ならいっそ、結婚しませんか？」という言葉には、どんな意味があると思いますか？

沼田：プロポーズのように聞こえるが、「ならいっそ」というフレーズには、**ほんとはそうでもないんだけど仕方なく**といったような、Bマイナーなニュアンスがとれるね

津崎：今のは誰の真似ですか？

沼田：俺の心の中のアバズレ？

津崎：h いやそういうタイプじゃないんだよな：

沼田：（（津崎に向かってほほ笑む））

津崎：知人の話です

<データ12>

みくりと結婚し仮面夫婦となった津崎の家に沼田と風見が遊びに来たシーン。津崎のことを狙っていたと沼田が冗談を言う。（『逃げるは恥だが役に立つ』2話より 32:23~）

沼田：ならいっそ結婚しませんかって 奥さんだったんだね： 逆プロポーズ、ロマンだね：

津崎：h うちはずっとビジネスライクです 需要と供給が一致した結果なので

沼田：要するにお互いが必要だった

津崎：そうです

沼田：いいねえ： ちょっと残念だけど

津崎：えっ？

沼田：だって俺、津崎君狙ってたから（.）（（津崎と見つめ合う））@@@ 冗談だよ、冗談

データ10、11、12の沼田の台詞だけを見れば、沼田はこれまでメディアによって行われてきた画一的な表象通りのキャラクターであり、「恐怖」の対象として描かれているのだと受け取られてしまいそうである。具体的には、シスジェンダー男性に強引に接触を迫るゲイ/オネエキャラクターという印象を持たれる可能性がある。だが、これについてはデータ10、11、12より後のシーンであるデータ9で沼田が偏見の否定を行っていることから、このシーンでは沼田は従来のステレオタイプ通りのキャラクターであるというミスリードを誘っているという演出の可能性はある。

『逃げるは恥だが役に立つ』はミスリードを使って主人公のみならず視聴者も巻き込んで偏見の否定・修正を行っていることから、性的マイノリティの中でも特にゲイに関するイメージに何らかの影響を与えている可能性が高いと推測される。ステレオタイプなオネエキャラクターだと視聴者に思わせ、それを覆すことでデータ2やデータ9の津崎のように、視聴者に自分の持っていた偏見に気付いてもらうという狙いがあるのではないかと推測される。しかしこのシーンの影響は必ずしもポジティブなものだけではないと考えられる。偏見の否定が行われるデータ9は2話後半のシーンであり、ミスリードを誘っていると思われるデータ10、11、12は1話から2話前半にかけて展開される。1話もしくは2話前半までで視聴をやめた視聴者にとってはステレオタイプの性的マイノリティ（特にゲイに関して）のイメージを助長するドラマとして映っている可能性がある。

次は、『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』からシーンを取り上げる。データ13の前半では、一瞬ではあるが、安達にとって黒沢が「恐怖」の対象として映ったことが伺える。後半では、寝ている自分に近づいてきた黒沢に安達が驚いており、この時も黒沢は「恐怖」の対象として安達に認識されていることがわかる。これらはどちらも安達自身によって否定されている。

<データ13>

安達が終電を逃し、黒沢の家に泊まることになるシーン。（『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』2話より 00:00~）

安達：（（心の声）） いいのか？俺、本当にこのまま黒沢んちに泊まって どうしよう い
ざ家の前まで来たら怖くなってきた 黒沢の気持ちも知っちゃったし

[安達の回想]

黒沢（回想）：（（安達が読み取った心の声）） 朝からこんなにツイてていいのかな めっちゃドキドキするんだけど

安達：（（心の声）） あんなものも見ちゃったし

[回想終了]

安達：((心の声)) 黒沢、俺に何を求めてるんだ？ はっh まさか襲われる？いやいやいやないないない((自分の頬を叩く)) それは黒沢に失礼

(中略)

[リビングで寝たふりをしている安達に黒沢が近づく。黒沢が安達のすぐそばにあったスマホを持ってリビングから出ていく]

安達：h ° びっくりした：°

安達：((心の声)) あ：襲われるとか思ってマジごめん黒沢

前半の黒沢に襲われるのではという安達の考えは、すぐに安達自身によって否定されており、その後後半でもう一度心の中で黒沢へ謝罪するという形で考えを否定している。偏見に気づき、考えを改めるという一連の流れは、偏見の否定をより分かりやすい形で示し、そしてまたより強固なものにしている。この流れは『逃げるは恥だが役に立つ』にも見られたが、『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』には自分一人の中だけで完結しているという相違点が見られる。

第2節では性的マイノリティを「恐怖」の対象として描いているシーンと、それを否定しているシーンを取り上げた。第1節と同様に表象の攪乱と呼べる描写も多く、主に偏見を否定するシーンがそれにあたる。性的マイノリティを「恐怖」の対象として描いているシーンが作中に見られたのは、『逃げるは恥だが役に立つ』と『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』の二作品のみであり、『きのう何食べた?』には見られなかった。

『逃げるは恥だが役に立つ』においては、否定のシーンよりも性的マイノリティを「恐怖」の対象として描いているシーンの方が多く見られた。これについては、「恐怖」の対象として描いているシーンを重ねることで、視聴者が沼田に対し「恐怖」の対象としてのイメージを持つようにし、その後「恐怖」の対象としてのイメージを否定するシーンを入れることで、主人公の津崎のみならず視聴者も巻き込む形で偏見の否定を行っている可能性がある。これにより、偏見の否定がより強固なものになっている。ただし、この意図が視聴者に正しく伝わるとは限らず、途中で視聴をやめてしまった層などにとっては、ステレオタイプ的なゲイのイメージを助長するドラマとして映ってしまう可能性がある。

『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』については、「恐怖」の対象として相手を認識した直後に、それを否定する描写が入れられている。安達が黒沢を「恐怖」の対象として認識するが即座に自分の考えを否定するという流れが、データ13では二回にわたり見られた。偏見の否定を、相手を「恐怖」の対象として認識する描写の直後に持つことで、黒沢が同意のない人物を襲う可能性のあるキャラクターだと誤解されるのを防ぎ、さらに安達が性的マイノリティに対して偏見を持っているキャラクターであると誤解されることも防いでいる。

またステレオタイプのゲイのイメージを否定することは、表象の攪乱になりうると考えられ、今回調査対象とした三作品は、表象の攪乱へのアプローチに偏見の否定という手段を用いていることが伺える。

第3節 表象の幅の広がり

『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』にて、ゲイ以外の性的マイノリティと思われるキャラクターが登場している。藤崎が恋愛に興味のないキャラクターであることがデータ14から読み取れる。データ15では、安達が藤崎の恋愛にとらわれない生き方を肯定している。

<データ14> 藤崎のお母さんを安心させるために安達に彼氏のフリをしてもらえばいいと同僚の女性たちに言われた安達と藤崎の会話。(『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』4話より 06:59~)

安達・藤崎：h ((同時にため息をつく))

藤崎：あっ ハモっちゃったね

安達：で ですね(.)何かありました？

藤崎：ああ 大したことじゃないんだけど 今度母親が田舎から出てくることになって

安達：え？

藤崎：それがちょっと憂鬱で

安達：h そうなんだ

安達：((心の声)) なんか意外 藤崎さん家庭的だし、勝手に仲良し家族なんだろうなって思ってた

藤崎：ごめんね リアクション困るよね

安達：あっいえ

同僚1：それさ めっちゃ分かる 心配なのは分かるけどさ、うるさいよね：

同僚2：そう 彼氏はいるのかとか結婚はまだ？で最後には孫の顔を見せろっていうじゃない

藤崎：ですね

安達：((心の声)) うわあ困ったなあ この手の話ってどう相槌していいか分かんねえんだよな

同僚1：うちなんて地元田舎だから、急にお見合い写真とか持ってこられかねないよマジで

藤崎：それはもう経験済みですね

同僚2：うわほんと？

同僚1：まあ誰でもいいから彼氏の代役でも立ててやり過ごせば？あっそうだ 安達君、彼氏のフリしてあげなよ

安達：えっ？あっいやそれは

同僚1：そしたらお母様安心するじゃん ね？

同僚2：うん 絶対そう

同僚1：まっ結果フリじゃなくなっても、それはそれだし[いいよね

安達：[いやあ

同僚1：どう？いいアイデアじゃない？（(同僚2と顔を見合わせ、頷き合う））

藤崎：(.)うん いざとなったら安達君にお願いしようかな

安達：ええ！？

同僚1：だってさ@@@

同僚2：お似合いだよ@@@

（中略）

藤崎：安達くんごめんね

安達：え？

藤崎：彼氏のフリなんてお願いしないから

安達：ああいや 気にしないでください

安達：((心の声)) ほ：らあつぶね 勘違いしなくてよかった：

藤崎：けど、嫌な気持ちになったでしょ

安達：いや みんな恋愛の話好きだなとは思いましたが

藤崎：え？

安達：別に人生それだけじゃないっていうか 俺、恋や愛が無くても毎日それなりに楽し
いっていうかh

藤崎：((微笑み、頷く)) (.)そっか

（中略）

藤崎：((安達が読み取った心の声)) 安達君は好き 人生、恋愛だけじゃないってさらっ
て言えちゃう感じが h きっと私が恋愛に興味ないって言っても、“そうなんですか”って
気にも留めない、はず h あ：あ まあ周りにどう言われようといいけど 普通を演じる
のも慣れたし

安達：((心の声)) 藤崎さん、いつも笑顔ですごく気が利いててすごいなって、ただ思
ってた けど 彼女の笑顔は身を守るためだったのかも

<データ15>安達が藤崎に、彼氏のフリをせずにお母さんに会い、安達から見た藤崎さ
んの話をすることを提案するシーン。（『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』4話
より 20:17~）

安達：藤崎さん

藤崎：ん？

安達：俺 藤崎さんのお母さんに会いますよ

藤崎：あっ だから彼氏のフリはいいから

安達：そうじゃなくて、俺から見た藤崎さんは仕事めっちゃくちゃ頑張ってる、毎日楽しそうだから安心してって

藤崎：((安達を見つめる))

安達：俺がお母さんに伝えますよ

藤崎：((安達を見つめ、目をそらす))

安達：あっごめん 何言ってるんだろう イテッ

藤崎：ううん ありがとう いつかお願いするかも ((ほほ笑む))

安達：((ほほ笑み、頷く))

データ14から、藤崎は他者に対して恋愛感情や性的欲求を抱かない「アロマンティック・アセクシャル」の可能性はある。藤崎は恋愛に興味がないことを周囲に隠し、普通を演じながら生きるキャラクターであることがデータ14、15から読み取れる。また、藤崎が本当にアロマンティック・アセクシャルであればLGBTの4つのセクシャリティに当てはまらないキャラクターが作品に登場することになり、認知度の低いセクシャリティをもつキャラクターを登場させることは表象の攪乱にもなる。また藤崎は最後まで恋愛に興味のない姿勢が一貫しており、このようなキャラクターをあえて恋愛ドラマに登場させ、データ15で藤崎の恋愛にとらわれない生き方が安達に肯定されることにより、多様な性のあり方や生き方を肯定するという作品のメッセージをより強調する狙いがある可能性が考えられる。

第5章 考察

第1節 逸脱と「恐怖」の対象に関する昨今の表象

今回調査対象とした作品には、これまでの表象の否定・修正を行ったシーンが複数箇所見受けられた。木場（2019）と村本（2017）ではこのようなシーンについて指摘されていないことから、昨今の作品にみられる特徴なのだと推測される。先行研究でも取り上げられているような、性的マイノリティのキャラクターが逸脱または「恐怖」の対象として描かれるシーンは調査対象の三作品すべてに見られるが、これらのシーンは偏見の否定を行うためにあえて描かれていることがわかる。先行研究との相違点として挙げられるのが、特定の性的マイノリティのキャラクターの表象というよりもむしろ、性的マイノリティでないキャラクターも含めたキャラクター同士の対話を通して偏見の否定・修正が行われていた点である。特に『逃げるは恥だが役に立つ』では偏見の否定・修正が他2作品よりも分かりやすく示されていた。「（※沼田は男女両方の視点を）持っていないでしょ ゲイだからどうこうじゃなくて、沼田さんは単に沼田さんなんですよ」（データ2）という発言や「俺が風見君によからぬことをするんじゃないかって心配になったんだよ 男とみれば誰彼構わず襲いかかると思ってんだよ」「その気のない相手に襲い掛かったら、男女問わず犯罪ですよ」（データ9）という会話が示す通り、まず台詞で偏見を否定していることがわかる。また『逃げるは恥だが役に立つ』ではゲイキャラクターに対し直接偏見の言葉が投げかけられることはない。そのためか偏見の否定・修正には三人以上の人物が関わっている。偏見を持ったキャラクター、性的マイノリティのキャラクター、性的マイノリティでなく、かつ偏見を持っていないキャラクターの三人である。性的マイノリティでなく、かつ偏見を持っていないキャラクターが間に入ることは、性的マイノリティのキャラクターの発言の説得力が増し、偏見を持ったキャラクターが自身の偏見に気づきやすくなる、という作用がある。これらにより、偏見の否定・修正がより分かりやすく描かれていると考えられる。

第4章のデータ1、2で主人公の津崎がゲイキャラクターである沼田に抱いていた偏見を第三者である風見に否定され、今までの言動を顧みて内省するという流れがあった。津崎が沼田に抱いていた偏見は「男女両方の視点を持っている」という、読み替えればポジティブな意味に持込えられそうなものであった。一見偏見だと気づけないような偏見をあえて描き、偏見を否定する描写を分かりやすく描くことにより、視聴者に偏見や他者を決めつけることについて考えるきっかけを作ろうとするねらいがあるのではないかと推測する。

このように視聴者に問題提起をするかのような表象の仕方は他にも見受けられる。『逃げるは恥だが役に立つ』における「恐怖」の対象として性的マイノリティのキャラクターが描かれているシーンとその否定については、否定のシーンよりも性的マイノリティを「恐怖」の対象として描いているシーンの方が多く見られた（データ9、10、11、12）。これについては、「恐怖」の対象として描いているシーンを重ねることで、視聴者が沼田に対し「恐怖」の対象としてのイメージを持つようにし、その後「恐怖」の対象としてのイメージを否定するシーンを入れることで、主人公の津崎のみならず視聴者も巻き込む形で偏見の

否定を行っている可能性がある。これにより、視聴者が偏見について考えるきっかけを作り出せるほか、偏見の否定がより強固なものになっている。ただし、この意図が視聴者すべてに正しく伝わるとは限らず、途中で視聴をやめてしまった層やかいつまんでストーリーを見ている層にとっては、ステレオタイプのゲイのイメージを助長するドラマとして映ってしまう可能性がある。

一方『きのう何食べた?』における偏見の否定は『逃げるは恥だが役に立つ』ほど分かりやすいものではない。これは『きのう何食べた?』では性的マイノリティのキャラクターに直接偏見を含んだ言葉が投げかけられていることに加え、偏見を言われてその場で言い返すことが出来ないという構図が『きのう何食べた?』でよく見られるからである。『きのう何食べた?』における偏見の否定・修正は、主に表情や仕草などのセリフ以外の部分で示されており、偏見を真っ向から否定する発言は少ない。これにより偏見の否定が分かりづらいものになっているが、同時に偏見を面と向かって言われた性的マイノリティの反応をよりリアルに描くことが出来ていると考えられる。偏見を投げかけられれば少なからず傷つくことは想像に難くないほか、即座に言い返すことの難しさや、反論や説明をしても分かってもらえないことへの諦めがあることが想像できることから、偏見に対し言い返すことが出来ない、またはしない構図が生まれるのは自然なことだと考えられる。

また『きのう何食べた?』の偏見を持ったキャラクターは、物語の最後まで偏見を持ったままであることを注目したい。特に史郎の母は史郎がゲイであることを受け入れたいと思っているのにゲイを最後まで理解できず、偏見を持ったままだったのである。現実におけるマイノリティの属性を理解し受け入れること、偏見の否定・修正を行うことの難しさを示しているのだと考える。

『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』では、偏見の否定・修正が主に台詞で行われているため、比較的分かりやすく偏見の否定・修正が描かれていると考えられる。だが、作中には性的マイノリティに対し偏見を持ったキャラクターが登場しない。そのため偏見の否定は、「柘植はゲイに対する偏見を持っている」と勘違いしていた六角の誤解を解く、という形で行われている。本当は偏見を持っていないが偏見を持っていると思われてしまい、すれ違うという描写は、取り上げた三作品の中では『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』にしか見られない。偏見を持ったキャラクターを登場させないという表象の仕方が特徴的であることがわかる。また「恐怖」の対象とその否定・修正の描き方については、「恐怖」の対象として相手を認識した直後に、それを否定する描写が入れている。安達が黒沢を一瞬「恐怖」の対象として認識するが、即座に自分の考えを否定するという流れが二回繰り返されている。偏見の否定を、相手を「恐怖」の対象として認識する描写の直後に持ってくることで、黒沢が同意のない人物を襲う可能性のあるキャラクターだと誤解されるのを防いだり、さらに安達が性的マイノリティに対して偏見を持っているキャラクターであると誤解されることも防いだりしている。

どの作品にも性的マイノリティに関する逸脱または「恐怖」の対象としての描写が見受けられたが、分かりやすさの程度の差はあれど必ずこの描写を否定・修正する描写があった。性的マイノリティに関する逸脱または「恐怖」の対象としての描写は、この否定・修正の描写を描くためにあえて描かれていることが推測される。これまでの画一的な描写を否定するというアプローチは、表象の攪乱と呼べるものである。

第2節 表象の攪乱

性的マイノリティの人それぞれに適切な表象をすることや、またはそういった試みを行うことを、木場（2019）は「表象の攪乱」と表しており、表象の幅を広げることにつながると述べている。今回調査した作品でも「表象の攪乱」が非常に多く見られ、先行研究で取り上げられた作品よりも表象の幅が広がっていることが推測できる。木場（2019）は新しいキャラクターの登場が攪乱のきっかけとなると述べており、第4章第3節のアロマンティック・アセクシャルの可能性があるキャラクターである藤崎の登場がこれに当てはまる。だが今回見られた攪乱のほとんどは、新しいキャラクターの登場というよりもむしろ、既存のイメージを否定することが攪乱のきっかけとなっている。木場（2019）は「効率的に攪乱を起こしたり様々な攪乱の形態を展開してゆくかが、抑圧的な法によって狭められた表象の幅を押し広げるための鍵を握っている」とも述べている。これを踏まえると、偏見を描き、それを否定するという表象のやり方は、効率的に攪乱を起こし得る様々な表象の形態の一つであると考えられる。

今回取り上げた作品の一つである『逃げるは恥だが役に立つ』は、性的マイノリティが話の主要なテーマになっているわけではない。にもかかわらず性的マイノリティのキャラクターが登場し、性的マイノリティに対する偏見の否定・修正が行われたのは、作品のもつメッセージの一つだと推測される「多様な恋愛の形を肯定する」ことをより強いものにするためではないかと考える。

村本（2017）によると、物語における性的マイノリティのキャラクターは恋愛が成就せずに終わるなどの「悲劇的結末」を迎えるというのが常套のパターンであった。また村本（2017）は1990年代後半から2010年代の恋愛ドラマ作品5本について「悲劇的結末」に至らなかった作品が複数あることを指摘している。これを踏まえると、今回調査対象として取り上げた『逃げるは恥だが役に立つ』、『きのう何食べた？』、『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』のいずれも、作品に登場する性的マイノリティのキャラクターは「悲劇的結末」に至らなかった。加えて、『30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』では「アロマンティック・アセクシャル」の可能性があるキャラクターが登場し、恋愛にとらわれない結末を迎えている。時代を経るにつれ新しい表象が登場し、昔よく見られた表象は見られなくなっていくことがわかる。

性的マイノリティの表象について、適切な表象をするため様々なアプローチをすることを表象の攪乱というが、どこまで行けば適切な表象がされたと言えるのか、判断するのは難しいと考えられる。だが、表象の攪乱が起これば続けることで性的マイノリティに関して何か特定のイメージがつくことが回避されると考えられる。最近の作品で見られなくなった昔の表象のされ方を採用している作品や、「悲劇的結末」を迎えるパターンの作品も、偏見・差別の意図がないと分かる形であれば最近の作品の一つとして発表されてもいいと考える。偏見の否定によって起こりうることの一つに、ステレオタイプ的な性的マイノリティの人物は現実にはいないと思われてしまうことである。ステレオタイプ的な性的マイノリティの

表象の例として「仕草や言動が女性らしい、女装をしているゲイ」などが挙げられる。これに当てはまる人物は現実には存在している。また「悲劇的結末」についても似たようなことが起こりうる可能性がないとは言い切れない。

性的マイノリティの描写に関し表象の攪乱が見られる作品は、現実の状況を反映した作品として、あるいはこれから目指していきたい理想を描いた作品として、作品を観た人々に考えるきっかけを与えたり、人々のこれからの心持ちが変わったりするなど、世間の性的マイノリティに対する認識に変化を与えていく存在になると推測している。

〈参考文献〉

- ・木場安莉沙, 2019, 「メディアに見る性的少数者の表象―再名づけの実践とイデオロギーの戦略―」『年報カルチュラル・スタディーズ』7: 117-142
- ・木場安莉沙, 2018, 「メディアにおける性的少数者のセクシュアリティ―その表象と性的イデオロギー―」『言語文化共同研究プロジェクト 相互行為研究④―談話とイデオロギー』4: 49-58
- ・村本陽香, 2017, 「性的少数者の描かれ方―テレビドラマ分析より―」『富山大学人文学部 平成 29 年度卒業論文』
- ・春日美穂, 2022, 「多様な生き方を嘉する世界 ドラマ『30 歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』が導くもの」『大正大學研究紀要』107: 269-286
- ・藤本由香里, 2019, 「『おっさんずラブ』という分岐点」『BL が開く扉』1: 131-150